椙山女学園大学

東日本大震災10年を映像で伝える -被災地連携プロジェクトの試み -

著者	栃窪 優二
雑誌名	椙山女学園大学研究論集 : 人文科学篇・社会科学篇・自然科学篇
号	53
ページ	107-118
発行年	2022-03-01
URL	http://doi.org/10.20557/00003332

椙山女学園大学研究論集　第53号（社会科学篇）2022

東日本大震災10年を映像で伝える
――被災地連携プロジェクトの試み――

栃　窪　優　二*

Creating a Documentary Record of the 10 Years Since the Great East Japan Earthquake and Tsunami
—An Attempt at a Film Project Conducted in the Disaster Area with Local Cooperation—

Yuji TOCHIKUBO

はじめに

2011年３月11日に発生した東日本大震災。宮城，福島，岩手を中心に死者・不明者は約１万８千人。日本では経験したことのない千年に一度の大規模地震災害だ。こうした災害の報道は，復興支援や防災対策の策定，防災意識の向上などをめざして，事実を正確に伝えるだけではなく，バランスの取れた継続性や長期的視点が求められる。しかしテレビ報道などは，直面する目の前の報道が優先され，取材者は組織内の人事異動で継続性が担保されず，長期的な視点に立った映像記録を残すのは難しいのが現状のようだ。そこで本研究では市町村のなかで犠牲者が約3800人と被害が最も深刻な宮城県石巻市をフィールドに継続取材して，2021年10月までに短篇の映像記録シリーズ，ドキュメンタリー，資料館用映像記録など合わせて115本の映像ドキュメントを制作・公開した。これは被災地と大学ゼミとの連携プロジェクトでもあり，映像で伝える市民ジャーナリズムの実践研究と共に，その成果を学生教育にフィードバックしようというメディア教育の新たな試みでもある。

震災から10年が経過。本稿ではこれまでのプロジェクトの取り組みやその成果を報告した上で，市民ジャーナリズムの役割りや課題，インターネット時代のメディア教育の方向性などを考察した。

１．プロジェクトの目的・狙い

本研究は東日本大震災の復興に向けた軌跡を映像記録に残し，今後の防災対策や防災意識の向上に寄与すると共に，その過程で映像の企画・制作や市民ジャーナリズムの役割

*　文化情報学部　メディア情報学科

り・課題を実証的に探り，学生のメディア教育にフィードバックする目的で行った。プロジェクトの枠組みは，著者（栃窪）が中心になり，ゼミ学生に参加を呼びかけ，被災地関係者の協力を得て現地を取材し，それを映像記録やドキュメンタリーにまとめ，インターネットなどで公開することを基本にした。取材フィールドは市町村の中で最も被害が大きい宮城県石巻市（隣接の女川町も含む）に決めた。被災地の課題や問題点を抱える代表的な市町村であり，著者が過去にテレビ記者として取材経験のある地域で，関係者の協力が得られるという事情もあった。ただし宮城・石巻市は名古屋市から遠く離れていて，取材・撮影には費用と時間がかかる。このため取材・撮影は 1 回＝ 2 ～ 3 泊程度で，年間＝ 2 ～ 3 回実施することを前提に計画した。プロジェクト開始時の映像企画コンセプトは下記の通りである[1)]。

【コンセプト】

・客観的な映像ドキュメントを制作する，感情に訴える手法はとらない
・インターネット（大学サイト）での動画公開を前提に制作する
・作品 1 本の長さは 5 分程度，ハイビジョン映像で制作する
・ 1 年間で映像記録シリーズ 5 本程度を目標に制作する
・シリーズ作品は単独で 1 本だけ視聴しても理解できる内容にする
・英語版コンテンツも制作して，世界に被災地のメッセージを発信する
・作品にはオリジナル音楽を使用し，他の映像作品との差別化を図る
・学生を積極的に参加させ，ナレーターは学生が担当する
・プロジェクトの実践を通して，質の高い大学の専門教育をめざす
・制作した映像作品はメディア教育の教材として活用する
・プロジェクトは10年間の継続をめざす

写真 1　現地での取材・撮影（2016年・石巻市立大川小学校）

2．これまでの取り組み

2011年４月末に１回目の取材・撮影を実施した。その後，年間３～４回のペースで進め，2021年10月までに計36回の取材・撮影を実施した。原則として著者（栃窪）１人で現地を取材したが，2014年６月，2015年２月，2016年２月，同年11月，2017年３月はゼミ学生（文化情報学部メディア情報学科３～４年生＝延べ16人）を同行した。撮影は業務用カメラと民生用カメラを併用し，2011年度はHDVテープ収録，それ以降はAVCHD（SDカード収録）カメラを使用した。取材のあと，構成を検討し，映像をノンリニア編集（EDIUS Pro）でつなぎ合わせた。音楽やナレーション等の音声はMA処理ではなく，ノンリニア編集で対応した。ナレーターは全てゼミ学生が担当し，作品の仕上げ・最終確認にも学生が参加した。

取材・撮影は現地関係者の協力を得て実施した。主な協力者は，石巻日日新聞社の武内宏之氏／平井美智子氏[2)]，石巻市復興まちづくり情報交流館のリチャード・ハルバーシュタット氏，大川小学校遺族・佐藤敏郎氏，日和幼稚園遺族・佐藤美香氏などだが，作品テーマごとにそれぞれ協力者がいて，紹介できないほど多くの市民や関係者にお世話になった。

取材・撮影には旅費が必要になる。基本的には著者の大学・個人研究費や自費で実施する計画だったが，2011年度椙山女学園研究費(B)，2012年度椙山女学園研究費(A)，2013年−15年は科学研究費・基盤研究(C)25350270の助成を受けてプロジェクトを実施することができた。2021年10月までに制作・公開した映像記録シリーズは100本，ドキュメンタリーは７本，映像記録（シリーズ）英語版は４本，資料館用映像記録は４本，合わせて115本の映像を制作した。制作作品は下記の通りである。

【映像記録（シリーズ）】計100本

01 「６枚の壁新聞から１年～記者が語る被災地・石巻」（５分30秒），2012年２月
02 「被災者の思い～記者が語る被災地・石巻」（６分45秒），2012年２月
03 「津波被災・記者として～九死一生の体験を語る」（６分00秒），2012年３月
04 「復興への道のり～記者が語る被災地・石巻」（５分45秒），2012年３月
05 「地域の絆を再生へ～学生ボランティアの記録」（５分45秒），2012年３月
06 「その時，リーダーは～新聞・経営者の決断」（４分50秒），2012年８月
07 「地域の絆を再生へ～女川・復興農園の記録」（４分30秒），2012年８月
08 「絆の駅・石巻ニューゼ～地域の情報を発信」（５分00秒），2012年11月
09 「女川・復興農園の秋～仮設住民の思い（前編）」（５分33秒），2012年11月
10 「女川・復興農園の秋～仮設住民の思い（後編）」（５分52秒），2012年11月
11 「震災から２年・石巻～祈りの灯り・希望の灯り」（３分35秒），2013年３月
12 「被災地から発信～石巻日日こども新聞」（５分55秒），2013年３月
13 「被災地・石巻の復興～震災から３年目」（５分45秒），2013年７月
14 「かんばろう！石巻～地元住民の思い」（５分00秒），2013年７月
15 「石巻川開き祭り～震災３年目の夏」（５分00秒），2013年８月
16 「震災後の金華山～こども記者が取材」（６分30秒），2013年８月

17 「石巻のお魚事情〜2013年夏」（４分30秒），2013年８月
18 「３年目の冬〜震災被災地・石巻」（４分40秒），2013年12月
19 「震災から３年〜被災地・石巻」（５分25秒），2014年３月
20 「震災から４年目〜被災地 宮城・石巻」（６分15秒），2014年７月
21 「大川小学校の今〜被災地 宮城・石巻」（６分55秒），2014年７月
22 「４年目の夏から〜被災地 宮城・石巻」（５分50秒），2014年８月
23 「夢は日米の架け橋〜テイラー・アンダーソン基金」（６分40秒），2014年８月
24 「地域を再生へ〜４回目の冬 宮城・石巻」（６分20秒），2015年１月
25 「地域情報を伝える」（５分00秒），2015年４月
26 「犠牲者の思いを伝える」（５分30秒），2015年４月
27 「津波被災・記者が語る」（４分55秒），2015年４月
28 「新しい地域メディアを作る」（５分15秒），2015年４月
29 「鉄道が全線開通〜５年目の春・石巻」（４分30秒），2015年６月
30 「震災被災地は復興へ〜５年目の春・石巻」（５分10秒），2015年６月
31 「５年目のボランティア〜震災被災地 宮城・石巻」（６分30秒），2015年８月
32 「ふれあい農園・４年目〜宮城・女川町の復興」（６分15秒），2015年９月
33 「石巻魚市場が完成〜復興への歩み」（６分35秒），2015年９月
34 「５年目の冬・石巻〜復興への歩み」（６分30秒），2016年１月
35 「海が見える町〜宮城・女川町の復興」（６分20秒），2016年１月
36 「震災から５年〜3.11石巻の１日」（５分30秒），2016年３月
37 「震災５年・復興の歩み〜石巻の映像記録」（６分30秒），2016年３月
38 「3.11そして未来へ〜石巻市民のメッセージ」（４分15秒），2016年３月
39 「『６枚の壁新聞』から５年〜被災地・石巻の現状」（６分45秒），2016年５月
40 「前を向いて歩こう〜『石巻の英国人』の思い」（６分50秒），2016年５月
41 「被災地を元気に！〜石巻焼きそば」（６分45秒），2016年５月
42 「小さな命の意味〜震災５年・大川小学校」（６分30秒），2016年５月
43 「震災６年目の夏〜宮城・石巻の復興」（５分00秒），2016年８月
44 「産業復興を目指して〜石巻専修大学の挑戦」（５分30秒），2016年８月
45 「震災６年目の秋〜宮城・石巻の復興」（５分30秒），2016年11月
46 「石巻の復興めざす〜石ノ森萬画館」（６分45秒），2016年11月
47 「まちびらき１年〜宮城・女川町の今」（６分00秒），2016年11月
48 「被災地・交流と挑戦〜石巻・橋通り COMMON」（５分15秒），2016年11月
49 「震災を語り継ぐ〜６年目の宮城・石巻」（６分55秒），2017年２月
50 「中心市街地を再生へ〜宮城・石巻の復興」（４分30秒），2017年２月
51 「地元市場 ハマテラス〜宮城・女川の復興」（４分30秒），2017年２月
52 「震災６年・3.11〜宮城・石巻」（６分45秒），2017年３月
53 「震災７年目・復興へ〜宮城・石巻の現状」（６分15秒），2017年３月
54 「震災７年目の夏〜宮城・石巻の現状」（５分50秒），2017年７月
55 「観光で町を元気に〜石巻・元気いちば」（４分45秒），2017年７月
56 「被災地に活気を〜石巻・橋通り夜店」（４分45秒），2017年７月

57 「コスモスこども食堂～７年目の宮城・石巻」（５分30秒），2017年７月
58 「石巻の漁村暮らし～牡鹿半島・折浜」（６分10秒），2017年７月
59 「震災７年目の女川町～復興の歩み」（２分50秒），2017年７月
60 「震災７年・3.11～宮城・石巻」（６分20秒），2018年４月
61 「震災８年目へ～宮城・石巻の復興」（６分35秒），2018年４月
62 「『６枚の壁新聞』から７年～元報道部長の思い」（５分20秒），2018年４月
63 「愛梨ちゃんの遺品～震災７年・母親の願い」（４分00秒），2018年４月
64 「若者が語り継ぐ～3/11メモリアルネットワーク」（６分30秒），2018年４月
65 「たびの情報館『ぷらっと』～震災７年・女川町」（３分30秒），2018年４月
66 「震災８年目の夏～宮城・石巻の復興」（５分00秒），2018年７月
67 「かわまちづくり～震災８年目・石巻」（４分15秒），2018年７月
68 「宮城・女川町の復興～2018年７月」（３分00秒），2018年７月
69 「震災８年・石巻3.11」（５分30秒），2019年４月
70 「震災８年・石巻の現状」（５分15秒），2019年４月
71 「石巻・かわまちづくり～震災から８年」（３分30秒），2019年４月
72 「園児の慰霊碑 建立～石巻・日和幼稚園」（４分30秒），2019年４月
73 「震災前の大川地区～復元模型で伝える」（４分45秒），2019年４月
74 「離島航路に新造船～石巻・網地島ライン」（３分15秒），2019年４月
75 「震災８年・女川町の復興」（４分30秒），2019年４月
76 「９年目の夏～宮城・石巻の復興」（４分45秒），2019年８月
77 「津波復興祈念公園～石巻南浜」（４分45秒），2019年８月
78 「金華山・龍神まつり～震災９年目・石巻」（４分45秒），2019年８月
79 「震災９年目の秋～石巻・門脇小学校」（３分45秒），2019年11月
80 「復興祈念公園の建設～９年目の秋・石巻」（４分00秒），2019年11月
81 「震災９年目の秋～石巻・大川小学校」（３分45秒），2019年11月
82 「水辺のテラス広がる～石巻・元気いちば」（３分00秒），2019年11月
83 「石巻・鮎川浜の復興～ホエールタウン開業」（３分45秒），2019年11月
84 「門脇小学校 一部解体～宮城・石巻の復興」（３分45秒），2019年12月
85 「宮城・女川町の復興～震災９年目の冬」（４分15秒），2019年12月
86 「震災９年 石巻3.11」（６分00秒），2020年３月
87 「震災９年 石巻市の復興」（５分15秒），2020年３月
88 「門脇小の一部解体完了～震災９年 石巻」（３分30秒），2020年３月
89 「復興祈念公園の建設～震災９年 石巻」（４分30秒），2020年３月
90 「震災遺構 旧女川交番～震災９年 石巻」（３分45秒），2020年３月
91 「屋台村に愛知酒場～震災９年 石巻」（５分15秒），2020年３月
92 「震災10年 石巻3.11」（６分15秒），2021年４月
93 「震災10年 復興の歩み～石巻の映像記録」（６分15秒），2021年４月
94 「母親が語る震災10年～石巻・日和幼稚園」（６分00秒），2021年４月
95 「石巻・大川小学校～父親が語る震災10年」（６分00秒），2021年４月
96 「記者が語る震災10年～津波被災・九死一生」（５分30秒），2021年４月

97 「震災10年 女川町の復興」（４分00秒），2021年４月
98 「鎮魂と追悼のモニュメント～石巻津波復興祈念公園」（４分30秒），2021年７月
99 「みやぎ津波伝承館～石巻南浜復興祈念公園」（５分45秒），2021年８月
100 「震災11年目の夏～宮城・石巻の復興」（５分45秒），2021年８月

【映像記録（シリーズ）英語版】計４本

01　英語版　「One Year After the Six Handwritten Wall Newspapers
—The Reality of Ishinomaki Hibi Shinbun」（５分45秒），2012年３月
23　英語版　「“To Be a Bridge Between Our Two Nations”
～ The Taylor Anderson Memorial Fund ～」（６分40秒），2014年10月
46　英語版　「Working to Revitalize Ishinomaki: The Ishinomori Manga-kan
(manga museum)」（６分45秒），2017年２月
49　英語版　「Storytelling about the disaster of the earthquake and tsunami
—6th year in Ishinomaki」（６分55秒），2017年６月

【ドキュメンタリー】計７本

「心の復興・石巻の願い～記者が語る被災地の１年」（29分00秒），2012年６月
「絆の駅・石巻～復興３年目の春」（23分45秒），2013年７月
「地域の絆を発信へ～女川・復興農園の願い」（17分15秒），2013年７月
「津波には負けない！～石巻・住民の思い」（17分00秒），2014年７月
「６枚の壁新聞から４年～被災地・石巻の願い」（29分30秒），2015年７月
「命を無駄にしないで～母親が語る震災６年」（20分15秒），2017年６月
「小さな命の意味～大川小 語り部10年」（23分30秒），2021年４月

【資料館用記録映像】計４本

「石巻市の復興記録（2018年度版）」（31分00秒），2018年10月
「石巻市の復興記録（2019年度版）」（33分10秒），2019年８月
「震災を未来へつなぐ～宮城県石巻市～（2020年度版）」（26分45秒），2020年６月
「震災を未来へつなぐ～宮城県石巻市～（2021年度版）」（33分15秒），2021年４月
※資料館用記録映像は「石巻復興まちづくり情報交流館」で上映展示

３．メディア等での発信

制作した全ての映像作品は椙山女学園大学 YouTube[3)]でインターネット公開して映像を配信した。その上で栃窪研究室サイト「映像で伝える！ジャーナリズムの世界～椙山女学園大学 栃窪研究室」[4)]と，椙山女学園大学文化情報学部サイト「学生制作の映像作品」[5)]で椙山 YouTube にリンクさせる形で映像公開した。またシリーズ37「震災５年・復興の歩み～石巻の映像記録」（６分30秒：2016年３月）は外務省から在ロシア日本大使館の震災追悼行事で上映させてほしいという依頼があり，映像を提供した。

このほか作品によっては映像祭・映画祭でノミネートや入賞して上映された。また新聞

でも大学ゼミの取り組みを紹介する記事が計21本掲載された。

【映像祭・映画祭での上映】

・地方の時代映像祭2012 市民・学生・自治体部門で奨励賞受賞上映　2012年11月
　ドキュメンタリー「心の復興・石巻の願い～記者が語る被災地の１年」(29分)
・あいち国際女性映画祭2017 短篇コンベンション部門・ノミネート上映　2017年９月
　ドキュメンタリー「命を無駄にしないで～母親が語る震災６年～」(20分15秒)
・あいち国際女性映画祭2021 コンベンション部門・ノミネート上映　2021年９月
　ドキュメンタリー「小さな命の意味～大川小 語り部10年」(23分30秒)
・地方の時代映像祭2021 市民・学生・自治体部門で優秀賞受賞上映　2021年11月

【新聞記事の掲載】

・石巻日日新聞の3.11学生が映像記録制作 中日新聞・東京新聞（夕刊） 2012年２月８日
・手書き新聞の記録映像　米博物館のHPに　中日新聞（朝刊） 2012年５月11日
・動画で伝える大震災５年　椙山女学園大の学生ら　毎日新聞（朝刊） 2016年２月10日
・被災地の現状 映像で　椙山女学園大・栃窪ゼミ　毎日新聞（朝刊） 2016年６月11日
・被災地に目を向けて　石巻焼きそば 学園祭で提供　毎日新聞（朝刊） 2016年10月８日
・石巻焼きそば 学園祭販売へ　椙大生 復興後押し　中日新聞（朝刊） 2016年10月14日
・石巻焼きそば 名古屋でも人気　椙山女大学祭　石巻日日新聞（夕刊） 2016年10月24日
・教訓 思い 続ける 被災者や復興の様子 映像に　読売新聞(朝刊･愛知版) 2017年３月９日
・教育とうかい 被災地の今 映像で伝える　読売新聞（朝刊・岐阜版） 2017年３月９日
・震災を語る「母」の姿撮る　椙大生ドキュメンタリー　読売新聞（朝刊） 2017年６月３日
・石巻７年間の映像贈る 復興の歩み 現地上映　読売新聞（朝刊･愛知版） 2018年10月25日
・石巻復興７年の記録　DVDにまとめ寄贈　読売新聞（朝刊・宮城版） 2018年11月２日
・復興プロセス映像で記録　椙山女大栃窪研究室　石巻日日新聞（夕刊） 2018年12月３日
・石巻 復興の歩み 映像に　名古屋・椙山女学園大学　河北新報（朝刊） 2018年12月28日
・映像でたどる石巻の歩み　椙山女学園大学DVD制作　毎日新聞(朝刊) 2019年３月４日
・復興の過程を追い続ける元記者の教授が学生と番組　中日新聞（朝刊） 2021年１月13日
・大川小の教訓 後世に　椙大生ドキュメンタリー完成　毎日新聞(朝刊) 2021年４月15日
・石巻の人と街見つめた10年　椙大･栃窪ゼミ映像完成　中日新聞(夕刊) 2021年４月30日
・石巻の記録 映像で未来へつなぐ　椙山女学園大学　朝日新聞（朝刊） 2021年６月15日
・大川小語り部の10年描く　女性映画祭で上映　朝日新聞（朝刊） 2021年９月１日
・震災後の石巻　撮り続け100本　椙山女学園大学　中日新聞（夕刊） 2021年９月２日

４．ゼミ学生の参加

プロジェクトには文化情報学部メディア情報学科・栃窪ゼミの３・４年生が卒業研究の一環として参加した。10年間で約140人のゼミ学生が映像記録の制作に取り組んだ。ただし学生の卒業作品は震災映像ではなく，名古屋市や東山動植物園などと連携・協力して制作する広報映像にした。宮城・石巻市まで取材・撮影に行くのは様々なリスクがあり，教

員としては地元・名古屋で卒業作品を確実に制作・完成させた上で，希望者がプロジェクトに参加する形にした。現地取材に参加できた学生は少ないものの，全作品のナレーション収録と仕上げ・最終確認はゼミ学生のほぼ全員が参加し，質の高い映像メディア教育を実践できた。なかでも映像祭・映画祭に参加したドキュメンタリーでは，ゼミ学生が贈賞式に参加して表彰を受け，上映会場で監督舞台挨拶をするなど，映像制作者として貴重な経験ができた。

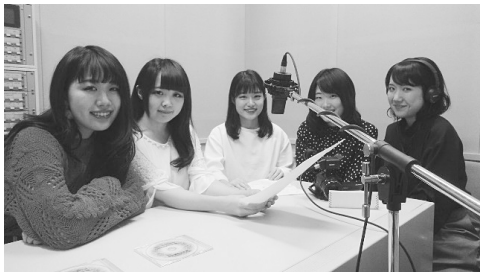

写真２　ナレーション収録

写真３　地方の時代映像祭に参加（2012年）

被災地の取材をきっかけにゼミ学生の自主企画イベントも生まれた。2016年２月に現地取材した学生４人が中心になり，ゼミ学生15人が同年10月に開催された大学祭で「石巻焼きそば」模擬店を出店した。取材で訪問した石巻茶色い焼きそばアカデミーの協力で，石巻のＢ級ご当地グルメ「石巻焼きそば」を調理して大学祭で販売し，売り上げ金の一部を義援金にしたほか，震災の映像記録を紹介するチラシを配布し，「震災の被災地を忘れないで！」と訴えた。１日＝150食を準備したが昼前には完売して大盛況だった。新聞等で紹介記事が掲載されたほか，当日は中京テレビのニュース取材を受けた。

写真４　石巻焼きそば取材（2016年・石巻市）

写真５　模擬店（2016年・椙山女学園大学）

５．授業等での活用

制作した映像記録はビデオ教材として活用した。メディア情報学科・専門教育科目の「ジーナリズム論」，「映像ジャーナリズム論」，「映像制作概論」，文化情報学部（共通科目）の「文化情報論」，全学共通科目の「安全学」などである。また椙山女学園高校・土曜講座や高校生向けの模擬授業でも活用した。ドキュメンタリーは長さが30分程度のも

のが多く，そうした作品は教材用に短縮版を制作して授業時間に合わせて活用した。制作した映像作品は数が多く，そのテーマや内容も多岐に渡っていて，教材として分析・評価をするには至ってない。下記は2012年度に実施した大学授業「文化情報論」（受講生１年生＝253人）と椙山女学園高校・土曜講座（受講生22人）を対象にした授業アンケート結果である[6)]。

表１　震災映像・教材活用の受講生アンケート結果（2012年度実施）

（回答者） 大学生253人　高校生22人	Q1 教材としては？		Q2 学習に役立ったか？	
	大学生	高校生	大学生	高校生
とても良い・とても役立った	131	13	102	10
良い・役立った	111	9	134	11
普通	7	0	13	1
やや悪い・少しだけ役立った	2	0	1	0
悪い・役に立たない	0	0	0	0
未回答	2	0	3	0

【受講生アンケートの自由記述】

〈大学生〉

・映像を使用することで，大切なことを確実にわかりやすく知ることができた
・新聞やテレビなどの伝える情報が，情報（事実）の一部でしかないことがわかった
・１つの視点だけでなく，多くの視点で見ることが大切だと思った
・現地の映像（音声）を見たことで，震災についてさらに深く考えようと思った
・ボランティアなどとは別に「情報を発信すること，伝えること」の大切さを学んだ
・社会の動きと密着した授業は，社会と情報との関係が良くわかった

〈高校生〉

・震災被災地の様子を知るとても良い機会となった
・新聞記者の取り組みやインタビューを聞くことで，新しい視点を持てた
・心の復興，提案型ボランティアが必要な被災地の状況がわかった
・今後の地震などに対する備えについて深く考えるきっかけになって良かった
・新聞やテレビでなくとも，市民（大学）が情報発信可能なことがわかった
・震災を絶対に忘れてはだめで，次の世代に伝えることが大切だと思った

【学校での DVD 版活用（教育機関への無償提供）】

・埼玉県の私立高校→修学旅行の事前学習用に活用
・神奈川県の私立高校→修学旅行の事前学習用に活用
・石巻市の中学校（教員）→道徳（防災教育）の教材に活用
・石巻市の小学校（校長）→防災教育の教材として活用

6．震災資料館等での展示・活用

制作した映像（主に資料館用記録映像）は，石巻市（震災伝承推進室），石巻市復興まちづくり情報交流館（石巻市／石巻観光協会），絆の駅・石巻ニューゼ（石巻日日新聞社）に寄贈し，震災の伝承や上映展示などで活用された。このうち石巻市復興まちづくり情報交流館では2016年ころから館内の大型テレビで上映展示を開始。当初は短篇の映像記録シリーズを何本か選んでリピート上映用 DVD を製作して提供していたが，2018年からは資料館用記録映像を制作して提供した。2020年からは館内でハイビジョン上映ができることが確認できたので，Blu-ray 版（リピート上映版）を製作・提供し，館内で上映展示されるようになった。

震災シリーズ01「 6 枚の壁新聞から 1 年」英語版は，2012年 5 月にアメリカ・ワシントン DC にある報道博物館「Newseum」（2019年末に閉館）に情報提供したところ，同博物館サイトでインターネット公開され，世界に映像が紹介された。この英語版は本学・国際コミュニケーション学部の教員と学生が翻訳・吹き替えナレーションを担当した。震災シリーズ23「夢は日米の架け橋」英語版はテイラー・アンダーソン基金に寄贈し，震災で亡くなったアメリカ人英語指導助手・テイラーさんの家族に紹介された。震災シリーズ46「石巻の復興めざす〜石ノ森萬画館」英語版は石ノ森萬画館（石巻市）に寄贈し，外国人来館者等への広報に活用されている。震災シリーズ23と46の英語版は，本学・文化情報学部のウィリアム・M・ペトルシャック先生とそのゼミ学生が翻訳と吹き替えナレーションを担当した。

ドキュメンタリーは，地方の時代映像祭2012で入賞した「心の復興・石巻の願い」が全国のケーブルテレビ（10局程度）で放送された。また「 6 枚の壁新聞から 4 年」は2016年に大阪・豊中市立 eMIRAI 環境交流センターで開催された震災関連イベントで上映された。震災シリーズ38「3.11そして未来へ」は2017年に埼玉・飯能市で開催された社会福祉大会で上映された。震災シリーズ21「大川小学校の今」は埼玉県荒尾市で開催された防災講座2021で研修教材として活用された。

7．プロジェクトの評価

映像ジャーナリズムが専門の大学教員が，東日本大震災の被災地・石巻市の現状や復興状況を伝えようと企画したプロジェクトは開始から10年余りが経過した。プロジェクトでは，映像記録の企画や取材，撮影，構成，映像編集，CG 作成，ナレーション収録，音声処理など映像制作全般のほか，インターネット映像配信やビデオ教材としての活用など，広範囲な活動を長期間継続して取り組んでいて，全体の評価は難しい。

映像制作数については年間 5 本程度を予定していたが，結果的にはその 2 倍以上の制作実績を残すことができた。その背景には小型デジタルカメラやコンピューターを使ったノンリニア編集の普及といった最新技術の恩恵がある。こうした制作環境が確保できなかったら，大学研究室レベルで100本を超える記録映像の制作は不可能だった。

ただし内容はそれぞれテーマが違うので一律に評価することはできない。ゼミ学生の現地取材は旅費が全額自己負担になるため限られた人数しか参加できなかったが，ナレー

ション収録・最終仕上げにはゼミ学生のほぼ全員が参加した。卒業制作とは性格が違う質の高い教育実践の場になった。作品の公開・発信もインターネット（YouTube）を活用して当初の計画通り実行でき，一般市民や行政はもとよりテレビ・新聞等の報道機関からも多くの反響が寄せられた。ドキュメンタリー映像は映画祭・映像祭へ参加して一定の外部評価を受けることもできた。大学授業等では著者担当のメディア情報学科・専門教育科目のほか，震災後に全学共通科目として開講された「安全学」でビデオ教材として活用し，本学オリジナル映像を使った充実した授業を実施することができた。2021年9月には椙山女学園（教職員）防災講習会の教材としても活用された。

映像記録の制作は，著者がプロデューサー／ディレクター／カメラマンとして，全作品のテーマや構成を決め，映像記録やドキュメンタリー等も合わせて115本のコンテンツを制作した。こうした映像制作では，1本1本テーマを決め，何を取材して，何を伝えるのか，という企画が極めて重要になる。一般的にはこうした部分が最も苦労する点だと言われている。しかし著者は民放テレビ局でディレクター・記者を長年経験していたので，それほど苦労は感じなかった。それよりも現地での取材・撮影の方が大変だった。特に震災直後は取材車両の確保が難しく，取材は徒歩が中心になり，気力と共に体力も必要になった。カメラ撮影は専門性の高い領域で，今回のようなクオリティの高い映像制作をめざす場合，普通は素人では対応できない。その点については，著者は若いころテレビ局でカメラマンをしていた時期があり，本職ではないものの，ある程度は対応できたと思っている。また映像取材は撮影技術だけが大切な訳ではなく，場合によってはディレクターや記者しか撮ることができない映像もあり，そうした撮影ができたケースもあった。

今回のプロジェクトは，被災地の抱える問題や課題が限りなく多く，取材フィールドを石巻だけに絞ったとは言え，映像で伝えられたことは事実の一部でしかない。また映像で伝えられれることも限られていた。そのとき伝え手が何を伝えるべきか，という部分が最も重要なポイントであり，それがジャーナリズムの原点になると思う。この部分については今後時間をかけて分析・評価したい。10年が経過した今，間違いなく評価できるのは本学・メディア情報学科の学生教育に大きく貢献したことだと考えている。

8．まとめ

宮城・石巻市では震災から10年が経過し，街の復興は大きく進んでいる。被災地の各市町村でも震災からの復興を10年計画で取り組んだが，全体としてはほぼ予定通り進んだようだ。堤防や道路，公共施設などの復興や整備は進んでいる。津波被災をめぐる裁判も，日和幼稚園や大川小学校は原告・被災者側の勝訴が確定して，防災への備えの重要性は未来に向けたメッセージになった。その一方で，大切な人を亡くした被災者の『心の復興』や経済基盤の確立は大きな課題になっている。本プロジェクトは震災10年が一つの区切りになるが，まだまだ果たさなければならない課題は山積している。今後も必要に応じて，宮城・石巻の復興の軌跡を伝え続けなければならない。

このプロジェクトは，被災地の住民，石巻市，女川町，宮城県，国土交通省，報道機関の関係者，学内の同僚教員，ゼミ学生の協力のほか，2011年度椙山女学園研究費(B)，2012年度椙山女学園研究費(A)，科研費25350270の助成を受けて実施できました。関係者

の皆様にお礼申し上げます。

参考文献等

1）栃窪優二・脇田泰子・松山智恵子・柴田亜矢子・渡邉 康（2013）「東日本大震災・映像ドキュメントの制作と発信」椙山女学園大学研究論集 第44号社会科学篇
2）栃窪優二（2013）「震災被災地・復興の現状―石巻・映像取材から探る―」椙山女学園大学 文化情報学部紀要 第13巻
3）椙山女学園大学 YouTube　https://www.youtube.com/user/SugiyamaUniv
4）映像で伝える！ジャーナリズムの世界～椙山女学園大学 栃窪研究室サイト～　https://tochikubo.ci.sugiyama-u.ac.jp/
5）椙山女学園大学 文化情報学部サイト『学生制作の映像公開』https://www.ci.sugiyama-u.ac.jp/media_a/index.html
6）栃窪優二（2017）「震災を語り継ぐ映像記録・ビデオ教材の開発」椙山女学園大学研究論集 第48号社会科学篇